

昭和二十四年八月二十一日の午前六時半、東京武蔵境の高杉庵にて、ある書籍の発行を祝う報告の式が執り行なわれました。その書籍とは、倫理法人会のテキストである『万人幸福（ほんにんこうふく）の葉』です。式の中で、著者である丸山敏雄は神棚に向かい次のような祝詞を奉納しました。

（略）今この武蔵野の高杉の庵に、人の世の蒼生（アヲヒトグサ）、地（ツチ）ノ上二十一億の人類の、正しき倫理、幸福の大道をさし示す、「万人幸福（モロビトミサチ）の葉」成りて、ここに報告の式を執り行ひますことは、世界人類の栄えのため、ことわきて日本国家再興再建のため、まことによろこびにたえません。

『丸山敏雄全集』第二十四巻下「誓詞・祝詞」

そして、発刊までにご尽力いただいた皆様に感謝し、『葉』の普及によって、「一日（ヒトヒ）も早く人の世をみさちみちみてる世と和（ナゴ）の平（タイフ）のよき国と守りさちわひたまへ」と祈願したのであります。

『丸山敏雄全集』に収められた、丸山敏雄の日記を頼りに、報告の式までの大方の経緯を辿ることが出来ます。

昭和二十三年五月十五日に、『葉』執筆の構想を練り始めています。それから約半年後の十一月十二日には十七の項目を制定し、それぞれの項の説明を三分の二、書き上げました。この時点ではあくまで原案であり、これ以降、何度も推敲を重ねていきます。昭和二十四年二月十五日には、十七項のうち、十六項がほぼ仕上がったことが見て取れます。残りの一項とは、現在の「九条 破約失福（はやくしつぷく）」であり、表現としては未



## 一日を振り返り 感謝の念で締める

完成だったようです。そして、二十日に『新世幸福の葉十七条』ほぼ完成」との記載があり、その後、校正が進みます。七月二十五日、当書を通じて著者が伝えたい考えを短く要約し、最後に書いた文が、『葉』の冒頭にある「序」の部分です。その間には印刷や製本等、多くの方々との協力を得ながら、八月二十一日を迎えたのでした。

祝詞奉納後の著者の行動は、出席者を驚かせます。それは、当時の定価百円を最初に払ったのが、誰であろう著者本人であったからです。

\*

創始者の取り組みから、後始末にかかわる二つの実践を学ぶことができます。

①【その日を振り返って反省する】。前述の通り、創始者は日記をつけていました。これは、振り返って一日にピリオドを打つ実践です。また、この日記があつたからこそ、現代の私たちも『葉』が完成するまでの経緯を知ることが出来るのです。

②【神仏や親祖先に仕事の結果を報告する】。特に、良い結果になった時ほど、この実践が欠けてしまうと高慢心に繋がります。「お陰様で」という報告が結果を私することなく、感謝の念を涵養することになります。結果は天の領分なのです。

そして、著者自身が『葉』の最初の購入者というところには、私物化しない姿勢のみならず、純粋倫理は人爲によってつくられたものではないという特質も表われています。

今回は、文字数に限りがあるため、『万人幸福の葉』が完成する迄の経緯の部分的な紹介となりました。これを機に『葉』の本質を深めたい方は、丸山竹秋著『万人幸福の葉 解説』、丸山敏秋著『万人幸福の葉を読む』をご参照ください。